HIDEKI NODA
KOHEI NAWA

野田秀樹

VOICE.13

ONE'S voice

野田秀樹 × アイダイヒト

名和晃平

変容する舞台と身体が織りなす文化サーカス構想

独自の「PixCell」という概念をもとに先鋭的な作品を展開する彫刻家・名和晃平さん。
芸術監督・野田秀樹と共にコラボレーションに取り組む文化事業プロジェクト
『東京キャラバン』に向けて、ブラジル視察から帰国した2人に聞いた、その壮大かつ愉快な構想とは?

舞台は人間の肉体と空間の彫刻。

ガラスビーズやプリズム、発泡ポリウレタン、シリコーンオイルなどさまざまな素材を、情報社会特有の浮遊する感覚や流動的思考のメタファーとして使うことで、身体や知覚のリアリティを表現してきたアーティスト・名和晃平さん。2009年には、京都の宇治川沿いにある旧サンドイッチ工場を自分たちの手でリノベーションした「クリエイティブ・プラットホームSANDWICH」を立ち上げ、多くのスタッフや海外から滞在制作に訪れる作家たちと共に活動している。

芸術監督・野田秀樹との出会いは、2020年に向けて始動したプロジェクト『東京キャラバン』でのコラボレーション。まずは2015年10月8日〜10日に、駒沢オリンピック記念公園での公開ワークショップを行い、2016年夏、五輪開催中のリオデジャネイロを皮切りに、東京キャラバン隊が国内外に出現し、文化芸術を運んでいく“文化サーカス”構想を視野に入れての対話は、未知のプロジェクトの可能性にあふれていた。

野田 名和さんは無菌室って入ったことある?

名和 精密機械工場に見学に行ったことがあるんですが、そのとき白い防塵服みたいなものを着て入ったのが、たしか無菌室でしたね。

野田 名和さんのつくりあげる作品には、どこか無菌の感覚がありますよね。このあいだの個展で、黒いシリコーンオイルがとめどなく降り注ぐインスタレーション作品(『Force』)を観たときもそんなふうに感じました。

名和 たしかに無菌状態を思わせるかもしれませんね。特にあの作品は、とても緻密な設計構造でつくられていて、ちょっとでも異物が混入すると、最適な粘度に調合したシリコーンオイルが潤滑に流れなくなるんです。

野田 演劇の場合は、どうしても人間ありきの現場なんで、無菌というわけにはいきません。人類の祖先自体がいってみれば菌みたいなものですから、菌類の末裔が演劇をやっているわけです(笑)。舞台美術は身体がそこに入って初めて完成するものだけど、名和さんは彫刻家として、人間の肉体をどれくらい意識しているのかな? リアルな人体がそこに介在していなくても、非常に完成度の高い作品だと思うんだけど。

名和 さっき『cocoon』を観劇して思ったんですが、演劇も彫刻も、その全体像に人間がどう関わるかだと思うんです。今日の舞台は正面性がなく三方を囲まれていて、観客も演技者も同じ位置づけで、その空間の中に集約されていました。特に暗転した場面では、舞台上の大勢の役者たちの身体の運動と、呼吸する群衆の気配が同時に伝わってきます。舞台というのは観客の座席を含めた空間的な彫刻なんだな、と思いながら観察していました。

野田 今、名和さんと取り組んでいる『東京キャラバン』の構想にも、そのアイデアを活かせるといいですね。考えれば考えるほどアイデアを思いつくけど、思いつけば思いつくほどオカネもかかることもわかってきましたが(笑)。

異種コラボレーションとその手応え。

野田 名和さんは、演劇の仕事だけやっていたらなかなか出会えないタイプの人です。ぼくが考えるような造形とは、完璧に違う方向からアプローチするアーティストだと思いました。これどうやってつくるの?と聞いたら、案の定、まったく違う角度から造形している。

演劇はまず言葉、台本ありきのもので、そこからイメージをつくっていくわけですが、名和さんのやっていることは、むしろぼくが台本を書く以前の作業に近いのかもしれない。たとえば、一滴の水がおちて変容していく、その形から考える。水平、垂直、重力といった、非常に概念的なところから入っていく。

名和 野田さんのおっしゃるように、彫刻と演劇には、空間をどうするかという共通のテーマがあります。今回『東京キャラバン』では、フォーマットから新しいものをつくろうとしていますけど、演劇と美術では受け入れる箱が違うので、両者のあいだにあるものを目指したいですね。お互いのボキャブラリーや方法論を重ねたり、ぶつけたりしながらつくっていくおもしろさがある。その手応えをすでに感じています。

野田 まだまだ不安が7割? でも楽しみも7割。合わせて14割(笑)。

名和 野田さんと話していておもしろいのは、どんどん新しい場面が出てくるんですね。すべてに動きがあって、常に流れていく。彫刻は本来動かないものなので、それをどうおとしこみ、動かすか。そこがチャレンジだと思ってるんです。舞台上に彫刻が巻き込まれて、30分とか1時間のあいだに、舞台美術もみるみる変化する作品になるかもしれません。

作る過程でドキドキさせる文化のサーカス。

野田 リオデジャネイロで視察した、海のそばにある巨大な工場のような空間で、その変容する舞台彫刻が実現すればすごいね。ひと言でいえば、これはキャラバン型のパフォーマンスイベントであり、世界各地で巡回する〈文化大サーカス〉なんです。普段は劇場にわざわざ出向かないような人たちのところに、こちらから出かけていって押し売りします(笑)。

ライブのおもしろさって、サーカスでいえば空き地にテントを作っている過程ですでに人をドキドキさせるというところにありますよね。東京は毎晩イベントが起こっているけど、そこをピンポイントで目指す人だけでなく、もっと多くの人を巻き込んでいきます。それはもしかしたら世の中の流れに

は逆行しているのかもしれないけど、ぼくらは抗う最後の世代ですから。アナログ世代からの反乱(笑)。

名和 野田さんの言われたように、キャラバン隊が移動する〈交通〉によって、文化が生まれ、芸術が変容していく。さらに国や地域を超えて、さまざまな芸術が乗っかってくるプラットフォームがつくれたらいいですね。その最終的な形は舞台でもいいし、展覧会でもいい、あるいは音楽でもいい。できるだけ縛りのないコンセプトがおもしろいと思っています。

野田 極端なことをいえば、食とビールと音楽さえあれば、キャラバンは簡単にできるし、人は集まるんです。でもそれだけに留まるんじゃなくて、もう少し先の新しい文化にチャレンジしたい。たとえば、名和さんのシリコーンオイルの作品『Force』を見せるなら、その場所で制作の過程が見えてもおもしろいかもしれないですね。

ベート、半分はパブリックな施設です。

以前は制作現場を人に見せるのはあまり好きじゃなかったんですが、やってみてわかったのは、想像以上にクリエイティブなことが起こりやすくなるということ。企画をもっていけば何かになる、クリエイティブプラットフォームともいえる場所が発生します。

もちろんそこからもう一度、個人の活動に戻る時間が必要です。これまでも、自分自身のなかから生まれてきた作品のコンセプトをプロジェクト化することで実現してきました。チームごとに分断化することが刺激になって、発想が格段に広がり、技術も発展し、表現がジャンプします。経験を積んでいけば、大規模のプロジェクトでもイメージを組み立てられることがわかってきて、以前のように規模に対して臆することがなくなりました。

野田 ぼくも『夢の遊眠社』を主宰していた頃は、今からは考えられないほど

これでいく、というものを先に決めることが大事です。たとえば、これは紙でいく、これは椅子50脚でいく、というように、その作品にいちばん合う素材やビジュアルを見つけます。でもね、舞台美術や役者の身体というフィジカルなイメージから新たな選択肢が生まれて、思い切ってそっちへ跳び込んでみよう、ということもあるんです。

ロンドンで公演した作品『THE BEE』では、僕は、はじめ紙が素材の舞台にしたかったのですが、東ドイツの舞台美術家がろう細工のようなステージを作り、その下に役者が使うものと同じ小道具を埋め込んだ。それを見て、足の下に過去にすでに起きている事件が何層にも重なっている、と感じた。これは、日本人が紙を素材に使っていては考えつかない、ベルリンの壁を経験したヨーロッパの発想だと思いました。

『赤鬼』という作品ではタイの役者たちを起用しましたが、日比野克彦さんか

Foam

year:2013　photo: Nobutada OMOTE | SANDWICH courtesy of Aichi Triennale 2013

絶えず湧き出る小さな泡(Cell=セル)は生成と消滅を繰り返しながら寄り集まって液面を覆い尽くし、泡の集合体(Foam=フォーム)として、代謝や循環を支える細胞のように有機的な構造を自律的に形成してゆく。

Force

year:2015　photo: Nobutada OMOTE | SANDWICH co urtesy of SCAI THE BATHHOUSE

黒いシリコーンオイルが、液状化した彫刻のように個体と液体の特性を曖昧にしながら、重力に従って天地垂直に流れ続け、時間・空間・物質の瞬間の連続のなかに私たちが存在する現実を直感させる。

点から線になり、面になる文化の潮流。

野田 ぼくが育った1960年代から1980年代にかけては、世界的に活発に行き来する文化潮流というものがありました。うろうろ動きまわることって大事なんですよ。今、世界にいるアーティストたちが、点で存在するのではなくて、線になり面になることが必要じゃないかと思うんです。まずは狭い心を捨てる(笑)。

名和 アーティストにとって、1人で工房に籠って、こんこんと湧くアイデアを形にしていく時期も必要だと思うんです。ただ、ずっとその状態では点で終わってしまう。ぼくらのスタジオ〈SANDWICH〉もこの6年でオープンプラットフォームとして開かれていきました。スタジオ内に見学者を受け入れ、週末になると学生たちが集まって授業の延長の場になっています。半分はプライ

完全主義で、細かなことも数センチ単位まで、すべてコントロールしてました。オレさまの言うことをきいてればいいんだという感じ?(笑)。ある頃から、誰かの判断でズレることがイヤじゃなくなりました。かえっておもしろいことが起こることがあるんですね。ぼくでなく他人が考えたことから、予期しなかった強さや広がりが生まれたという体験を何度かしたんです。それで、ちょっとそっち側に傾いてみようかしらと。

名和 〈SANDWICH〉では、建築チームが特にそういう側面をもっているかもしれません。集団の思考ですね。建築も演劇も集団でつくりあげるものですが、演出はすべて野田さんの頭の中にあるわけですよね。現場でそれをどうやって共有するんですか?

野田 台本を書いているときには、すでにある程度の形が仕上がっているんだけど、現場ではなかなかその通りにはいきません。まず演出家として、今回は

らの舞台美術のプレゼンテーションが、ただ紙に四角が描いてあるだけだった。最近忙しかったのかな?と(笑)。実はそれは真っ白のアクリルで、そこにタイ人の褐色の身体が映えるという狙いでした。それは、実際ピュアで神聖な印象を与えました。彼らはカーテンコールのお辞儀もまた合掌したりして素敵なもんだから、観客も欺(だま)されて拍手がすごかった(笑)。

名和 装置空間としての舞台美術がときには作品全体を動かすこともあるということですね。『東京キャラバン』でも、美術とパフォーマンスが互いに刺激しあうような空間を目指したいと思っています。実現に向けて、引き続きよろしくお願いします!

モデレーター・文:住吉智恵　写真:渡部孝弘

今回のアイタイヒト

野田秀樹 HIDEKI NODA

のだ・ひでき 1955年、長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に「劇団 夢の遊眠社」を結成。92年劇団解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『パンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MIWA』などの話題作を発表。歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』などで、故 中村勘三郎丈と組み、好評を博した。国内のみならず海外でも精力的な創作活動を展開。15年11月、モーツァルト歌劇『フィガロの結婚〜庭師は見た!〜』を演出、全国10カ所で上演。16年1月〜4月NODA・MAP最新作、『逆鱗』を上演予定。

名和晃平 KOHEI NAWA　http://www.kohei-nawa.net/

なわ・こうへい 1975年大阪生まれ。2003年 京都市立芸術大学大学院博士課程修了。98年 英国王立美術院交換留学。現在、京都造形芸術大学大学院教授。11年 東京都現代美術館で個展『名和晃平 – シンセシス』、13年 犬島「家プロジェクト」で建築家・妹島和世と協働。同年あいちトリエンナーレに新作『Form』出展。15年 SCAI THE BATHHOUSEの個展にて最新作『Force』発表。09年 京都伏見区にクリエイティブプラットフォーム「SANDWICH」設立。自身の作品制作からauデザインプロジェクト「iida」、ミュージシャンゆずのPVやステージセット、COMME des GARÇONSとのコラボレーションまでプロジェクトは多岐に亘る。NYメトロポリタン美術館ほか所蔵館多数。

東京キャラバンとは

野田秀樹氏の発案により、東京をはじめ日本の多種多様な芸術が集う文化発信の新しいムーブメントです。野田とともに、彫刻家・名和晃平氏、現代美術家・日比野克彦氏の呼びかけにより賛同する様々なアーティストが参加し、2016年夏、五輪開催中のリオデジャネイロを出発点として、東京キャラバン隊が国内外各地に出現し、「文化大サーカス」を繰り広げていくとともに、国や地域を越えた交流を、継続的に図っていきます。今年度は、五輪文化プログラムに先駆けて実施する「リーディング・プロジェクト」の一環として、パフォーマンスの制作過程を一般公開します。
詳細は https://www.artscouncil-tokyo.jp/ をご覧ください。

主催:東京都　共催:アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

NODA・MAP 第20回公演「逆鱗」

2016年1月29日(金)〜3月13日(日) プレイハウス

「人魚は、ひとつの『逆鱗』を食べる」

昔々の昔々のその昔、沈没船の窓越しに交わした人魚と人間の約束。その約束を果たすために、人魚は人間のふりをして、自ら志願し地上に現れた。だが、その人魚が現れた場所は、海中水族館の『人魚ショー』の真っただ中。そこで人魚は、人魚のふりをした人間と出会う。やがて深夜の海中水族館、そこに運び込まれてきたある「モノ」とともに物語は深い深い海の底へと潜りこんでいく。そこに、見えてくるものは……。

作・演出 野田秀樹

出演:松たか子　瑛太　井上真央　阿部サダヲ
池田成志　満島真之介　銀粉蝶　野田秀樹

料金【全席指定】S:9,800円/A:7,800円/サイドシート:5,500円※

※25歳以下の方は、東京芸術劇場ボックスオフィスでのみ、サイドシート3,000円にてご購入いただけます。(入場時要証明書)

【お問合せ】NODA・MAP 03-6802-6681

2015年12月12日(土)一般前売開始

詳細はHPへ　www.nodamap.com/
www.geigeki.jp/

企画・製作 NODA・MAP　主催:NODA・MAP　共催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

地方公演

大阪公演:2016年3月18日(金)〜3月27日(日) シアターBRAVA!
北九州公演:2016年3月31日(木)〜4 月3日(日) 北九州芸術劇場 大ホール

HIDEKI NODA × KOHEI NAWA